

## 特集

# 英語ディスカッションクラスの軌跡 ～立ち上げから現在まで、そして新カリキュラムへ～

英語ディスカッションクラスは、2008年度のパイロット授業、2009年度の異文化コミュニケーション学部・コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科での必修授業を経て、2010年度より必修統一カリキュラムとして全学部展開することとなった。1クラス8名程度の少人数で実施する英語ディスカッションクラスは、学生一人一人の発言時間・機会を確保し、ディスカッション・コミュニケーションに必要な英語スキルの修得や流暢さの向上を目的として、言語教育論に基づき学生の十分な対話時間と教員のきめ細やかな指導が学修成果に効果的に現れるよう設計された授業形態である。英語ディスカッションクラスのカリキュラム企画・授業運営は、英語ディスカッション教育センターに所属する4名の英語ディスカッションプログラムマネージャーと40名を超える多様な国籍の英語ディスカッション講師が担ってきた。また、これだけ多くの外国人教員を有する組織の運営や多岐にわたる学生対応は、本学学部教員と事務スタッフで構成される事務局が行ってきた。

2020年度に英語新カリキュラムが導入されることに伴い、2019年度末をもって英語ディスカッションクラスは再編成され、英語ディスカッション教育センターは廃止される。本特集では、これまで約10年にわたる英語ディスカッション教育センターの活動を振り返るとともに、蓄積されてきたノウハウをどのように英語教育新カリキュラムに継承していくか考える一助としたい。

## 英語ディスカッション教育センター発足

元英語ディスカッション教育センタープログラムマネージャー／  
ランゲージセンター英語教育講師

諸井 貴子

## 英語ディスカッションクラス新設の狙い

2010年度に全学部1年次の必修カリキュラムになった英語ディスカッションクラスは、学生が中等教育で学んだ受動的スキルを基礎に、今日の話題を仲間と議論するスキルを身に付けることを目的として新設されました。第二言語習得理論の研究、当時他大学で行われていた少人数の英語コミュニケーションの授業の視察、そして2008、2009年度に行ったパイロット授業の経験を基にカリキュラム作成が行われました。英

語力のレベルや英語に対する興味のレベルに関係なく、全ての学生が学習成果を実感することができる。そして、将来的に英語でコミュニケーションをとる場面で使えるスキルを身に付けることができる統一カリキュラムにすることが、一番のミッションでした。そのために、4つの分野（認知、行動、感情、実用性）での学生のニーズ分析をし、目標と方針を定め、教科書、教授方法、毎授業の内容、評価方法を作り上げていきました。カリキュラムの詳細については Introduction to EDC (Hurling, 2012) をご参照ください。

## 教員研修とコミュニティ

カリキュラム作成および運営担当者間の共通認識として、英語ディスカッションクラス成功の鍵は教員にあると考えていました。教授方法や評価方法が各教員の裁量によるのではなく、細かく決められているカリキュラムゆえ、全ての教員がカリキュラム開発者と同じようにカリキュラムの目的や理論を理解し、カリキュラム発展のために貢献できる機会を作ることが重要だと考えました。そこで、Instructor Handbook を作成し、プログラムの理念と概要、講師の日々の業務内容、そして授業内外で起こりうる問題と対処方法・判断基準などを明確に示しました。加えて、立教大学の英語ディスカッション教育センターで働くことによって教員自身がティーチングの質と技術の向上につながられるという付加価値が付けられればと思っておりました。そのために、入職時には約1週間に及ぶ研修で理論の学習とティーチングの練習を行い、その後は、週1回の教員FDミーティングにて、授業方法、テキストの内容、評価方法、学生とのコミュニケーション方法などを教員間で話し合ったり、プログラムへフィードバックを行ったりする機会を設けました。また、定期的に授業オブザベーションを行い、教員が自身のティーチングについて振り返る機会を作りました。プログラムマネージャーは、教員の授業での経験や教科書に対するフィードバックを通して、カリキュラムに不足していることやさらなる発展のために必要なことを学び、プログラム運営に反映させていきました。教員研修に重きを置いたことにより、教員間や教員とプログラムマネージャーの間で、日々の授業で行われている事柄や学生の学びを共有し、ティーチングやカリキュラム内容についてオープンに話し合う文化を持つコミュニティが生まれました。このコミュニティを構築できたことが、10年間にわたり、1学期に500クラス以上開講する授業の質を維持することができた大きな要因だと考えています。教員研修の詳細については Instructors' Views on Tasks Outside the Classroom (Livingston & Moroi, 2015) をご参照ください。

## 学生の当時の反応

英語ディスカッションクラスが全学部展開となった2010年度の春学期、最初のディ

スカッションテストが第5週目に行われました。テストでは通常、学生は4人1組になって16分間英語でディスカッションを行います。学生は英語だけを使い、与えられたトピックについて、自分の意見を言ったり、仲間の意見に賛成したり質問したりする中で、それまでに授業で学んだディスカッションスキルを使用することで評価されます。テストを実施してオフィスに戻ってきた教員たちの興奮は、10年経った今でもはっきりと覚えています。□々に、テストを終了した時の学生の達成感あふれる表情や喜びの様子、学生のテストパフォーマンスの高さについて話していました。教員たち自身もカリキュラムが学生のニーズに合っていること、自分のティーチングの成果が学生のパフォーマンスという形で実感できた瞬間でした。年度末の学生による授業評価アンケートでも、最初は英語のディスカッションができるとは思わなかったが楽しく学べた、間違えても英語を話す度胸がついた、テストも仲間と協力して乗り越えられた、などポジティブな意見が大半でした。一方で、少数ですが、英語ディスカッションの授業形態に戸惑う学生もいました。英語力が高くないので話せないし話したくない、少人数で話すのは恥ずかしい、日本人同士で英語で話すことに意味があるのか、というのが主な理由でした。こういった学生たちには、英語ディスカッション教育センターの事務局に出向いてもらい、当時の副センター長やプログラムマネージャーが対応しました。完璧な英語で話す必要がないこと、間違いから学んでいくことの大切さ、日本人同士でも英語を練習することの意味などを説明したり、一緒にテスト対策をしたり、センターとしてできる限りのサポートを行いました。2年目以降は、英語ディスカッションの授業を経験した学生からの口コミ評判や、大学広報部門による受験生への情報発信もあり、初年度のような学生からの相談はほとんどなくなりました。近年では、初等および中等教育で英語のコミュニケーションに慣れ親しんでいる学生も増えましたので、英語ディスカッションの授業を楽しみにして入学したという声を多く聞くようになりました。

## 事務局のサポート

上記で述べたように、実際に教室で行われる授業の成功は、学生のニーズに合ったカリキュラムと教員コミュニティによる部分が大きいと思います。一方で、英語ディスカッション教育センター運営の成功という点で強調したいのは、教員をサポートくださった事務局の皆さんの活躍です。プログラム設立当初は、言語サポートが必要な外国人教員を多く採用していることに対して、少なからず不安の声があったことを記憶しています。プログラムマネージャー4名中3名を含む40名近くが外国人教員でしたので、契約書から日々の連絡事項まで、全て英語でコミュニケーションをとる必要がありました。また、言語の問題だけでなく、自国ではない日本という文化の中で働く外国人教員にとっては、当然ながらさまざまな疑問があり、文化的・組織的背景の理解が必要な事柄も多くありました。そのような時には、教員が疑問を持ったままの状態にならないように、どのような案件でも全ての教員に、誠意を持って丁寧に、時に忍耐強く、対応を

していただきました。事務局の皆さんが英語ディスカッションクラスの趣旨を理解し、日々教員が気持ち良く、そして不安なく働ける職場環境を整えてくださいました。このサポートがあったからこそ、教員一人一人がティーチングに集中し、良い授業を学生に提供することができました。

## 最後に

2010年度より毎学期行われている授業評価アンケート結果から、英語ディスカッションクラスが学生にとって非常に満足度の高い授業であったことが分かります。その他にも、卒業生が職場で英語のコミュニケーション力を同僚に褒められたことを英語ディスカッションクラスのおかげだと言ってくれたことや、他の必修英語や2年次生以上を対象にした英語の授業を教える先生方から英語ディスカッションクラスができてからコミュニケーションアプローチがより機能するようになったというお言葉をいただいたこともありました。この10年間で設置当初の目的はきちんと達成できたのではないかと考えています。

### 参考文献

- Hurling, S. (2012) . Introduction to EDC. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 1, 1-10.*
- Livingston, M. & Moroi, T. (2015) . Instructors' Views on Tasks Outside the Classroom. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 3, 333-347.*

## Standardizing Support for Teachers and Students in the Center for English Discussion Class

英語ディスカッション教育センタープログラムマネージャー  
Davey Young

Through the years, the Center for English Discussion Class (EDC) teachers have come from over a dozen different countries, including Japan, with qualifications ranging from Cambridge CELTA certificates to doctoral degrees in applied linguistics. Managing such a diverse staff has been no different than managing a staff of predominantly Japanese faculty. While foreign teachers in Japanese universities have reported feeling marginalized and disillusioned with how their university positions them (Mayo, 2019), program managers and administrative staff at EDC have worked hard to promote a collaborative work culture where all instructors have an equal voice and opportunity to affect positive change. Collecting regular feedback from instructors on all aspects of the course—from textbook content to faculty development—has been a key aspect of ensuring instructors' voices are heard. The office arrangement into four team rooms that balance representation by nationality, gender, and experience teaching (among other factors), as well as a robust, schematized, and transparent faculty development system, further help ensure a collaborative culture within EDC.

One unifying characteristic of all EDC teachers is their ability to deliver high quality, student-centered lessons to a uniform standard. EDC's high standards for teaching have historically begun during recruitment, at which time potential new teachers have had to demonstrate their understanding of and ability to implement a communicative approach to language teaching through a model lesson and follow-up interview. In the past, new instructors hired into the Center then completed four days of intensive orientation to learn how to deliver all aspects of a typical EDC lesson to a uniform standard. Finally, EDC instructors progressed through a sequenced professional development scheme consisting of three main pillars: regular faculty development sessions, individual professional development projects published in the Center's journal, and classroom observations.

In order to meet the needs of more than 4,500 students each year, instructors participate in regular faculty development sessions to help ensure that course and lesson aims are met in a unified way (Livingston & Moroi,

2015). As Lesley (2017) notes, these sessions have varied in scope according to how instructors are divided into four overlapping groups: new instructors, specific tenure groups, teachers of specific types of students (e.g. proficiency levels), and all instructors. Faculty development sessions cover an array of purposes related to ensuring a unified curriculum, most notably discussions of the theory behind curriculum design, principles behind individual lesson stages, and rater-norming for assessment purposes. Such sessions have been shown, with specific regard to the EDC context, to promote greater uniformity in terms of both lesson delivery (Livingston & Moroi, 2015) and assessment (Doe, 2012). A syllabus unified in such a way appears fair from a student standpoint, and allows instructors to collaborate and share best practices in implementing the syllabus (Brereton, 2019). An instructor handbook and textbook guide accompanying each edition of the course-specific textbook further ensure uniformity, and all of these documents undergo an annual evaluation and revision process carried out by program managers (Young, 2017).

Individual professional development projects completed by every teacher and published in the Center's in-house journal, *New Directions in Teaching and Learning English Discussion*, is another pillar of EDC's professional development scheme. Schaefer and Lesley (2019) note that the use of this journal for program-specific professional development has a range of practical, theoretical, and vocational benefits for both teachers and students. One of the EDC program managers' responsibilities is editing this journal, as well as counseling individual instructors on the completion of their project and writing process. All papers from *New Directions in Teaching and Learning English Discussion* are available on the Rikkyo Roots repository, and the journal itself holds an ISSN number and is registered with the National Diet Library.

The third and final pillar in the Center for English Discussion Class' professional development scheme has been observations, "the cornerstone of quality assurance" (O' Leary, 2014, p. 11). Without classroom observations, program managers and, by extension, university leaders would have little more than self-reports and hearsay when attempting to determine a teacher's true efficacy or ability in the classroom (Bailey, 2006). The Center for English Discussion Class has used a progression of video observations followed by post-observation conferences to help teachers critically reflect on and improve their ability to provide high quality EDC lessons. Video recording

lessons for critical reflection is a well-established practice that can have a variety of positive impacts on teacher performance. These benefits include mediating teacher reflection, noticing student behaviors and responses, anticipating aspects of the lesson or instruction that need improvement, encouraging a focus on concrete details and improving them from lesson to lesson, developing sensitivity to classroom talk, allowing reflection on teachers' practice, and supporting the voices of new teachers (Farrell, 2018; Mann & Walsh, 2017).

Supporting teachers' development in this way has the ultimate aim of improving Rikkyo students' educational experience, as creating expertise among teachers translates to better learning outcomes for their students. However, it is still necessary in some cases to provide support for students beyond what their teacher can give them in the classroom. To this end, over the years the Center for English Discussion Class has developed a number of support services for its students. The foundation of this support has been a Student Handbook containing useful information, course aims, and expectations for students in both English and Japanese. The Student Handbook has been revised every year and distributed to all students at the beginning of each semester. Additionally, a specialized grade reporting system has been employed to provide students with weekly assessment and feedback, as well as to communicate important information to students. All grades have been double reported via a paper copy of an assessment form for each class.

Additionally, since the 2016 academic year, the Center for English Discussion Class has implemented a framework for supporting students with disabilities (SWDs). This framework ensures that a continuum of support is provided to SWDs by counseling teachers on how to best meet student needs through the use of inclusive practice and lesson accommodations, and by including a number of accountability checks to ensure no students slip through the cracks. Teachers have responded well to this support (Young & Schaefer, 2019), which would not have been possible without the cooperation of the Students with Disabilities Support Office. Data analysis using the specialized reporting system mentioned above revealed that the framework's implementation corresponds with an increase in SWDs' ability to meet course aims, as well as with a lower rate of absenteeism, compared with SWDs enrolled in EDC prior to 2016 (Young, Schaefer, & Lesley, 2019). The efficacy of this framework suggests that all colleges would benefit from

similarly structured support. However, it is important to emphasize that stakeholders from individual departments or centers must be proactive in creating and implementing such a system.

EDC's approach to standardizing support for both teachers and students through the implementation of a strongly unified syllabus has been positively received by students and teachers alike (Brereton, Schaefer, Bordilovskaya, & Reid, 2019). However, English discussion class instructors will face a number of new challenges resulting from the curricular changes coming to Rikkyo University's English language programming in 2020. The new Center for Foreign Language Education and Research is reducing the duration of EDC from two semesters to one while simultaneously increasing class sizes from eight students to 10. The second semester will be replaced with a debate class, and so instructors will need to learn how to best implement this new course without the same support they have had within the Center for English Discussion Class. The organizational structure that sees program managers supporting English discussion instructors in a systematic way, as well as continually developing the course and ensuring a uniform standard of lesson delivery, will also be abolished. Without such a strongly unified syllabus and systematized support for either the discussion or debate course, it will be important to collect instructor and student views on these courses at the end of the 2020 academic year in order to best meet students' needs.

## REFERENCES

- Bailey, K. M. (2006). *Language teacher supervision: A case-based approach*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Brereton, P. (2019). Teacher perceptions of working within a strongly unified curriculum. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 7*, 257-271.
- Brereton, P., Schaefer, M. Y., Bordilovskaya, A., & Reid, S. (2019). An analysis of student survey results on classroom experiences and learning outcomes within a large-scale English discussion program. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 7*, 272-297.
- Doe, T. (2012). Assessment: Improving rater reliability on the EDC discussion test. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 1(1)*, 1.11-1.18.
- Farrell, T. S. C. (2018). *Research on reflective practice in TESOL*. New York, NY: Routledge.
- Hurling, S. (2012). Introduction to EDC. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 1(1)*, 1.2-1.10.
- Lesley, J. (2017). Managing professional development in a unified curriculum: The FD planning and review cycle. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion, 5*, 303-312.
- Livingston, M. and Moroi, T. (2015). Instructors' views on tasks outside the classroom:



- A report on a questionnaire survey. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion*, 3, 333-351.
- Mann, S., & Walsh, S. (2017). *Reflective practice in English language teaching*. New York, NY: Routledge.
- Mayo, N. (2019, August 5). Foreign academics in Japan 'marginalised' and 'disillusioned'. *Times Higher Education*. Retrieved from <https://www.timeshighereducation.com>
- O' Leary, M. (2014). *Classroom observation: A guide to the effective observation of teaching and learning*. Oxford, UK: Routledge.
- Schaefer, M. Y. & Lesley, J. (2019). In-house journals as a form of professional development. *2018 PanSIG Journal*, 210-216.
- Young, D. (2017). Textbook revision in the EDC context: Lesson activities. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion*, 5, 313-319.
- Young, D., & Schaefer, M. Y. (2019). Collaborative support for students with disabilities. In P. Clements, A. Krause, & P. Bennett (Eds.). *Diversity and inclusion*, Tokyo: JALT, pp. 136-142.
- Young, D., Schaefer, M. Y., & Lesley, J. (2019). Accommodating students with disabilities studying English as a foreign language. *Journal of Post-secondary Education and Disability*, 32(3), 311-319.

# 「ディスカッション」から「クリティカル・シンキング」へ 一思考力を育てる全カリ英語カリキュラムの開発

外国語教育研究センター設置準備室特任准教授  
山本 有香

「英語の立教」と称されてきた立教大学では、2010年に1クラス8名程度という少人数で行う「英語ディスカッション」を全学部1年次必修とするなど、これまでも他大学に先駆けて先端的かつ特色ある英語教育を展開してきました。2020年度より、外国語教育研究センターを中心に、それをさらに発展させ、新しい1年次英語必修カリキュラムをスタートさせます。具体的には、英語ディスカッションクラスの授業内容をこれまでの1年から半年に集約し、秋学期に英語ディベートクラスを新たに設けます（図1参照）。

図1. 2020年度以降の1年次英語必修科目カリキュラム（立教大学HPより抜粋）



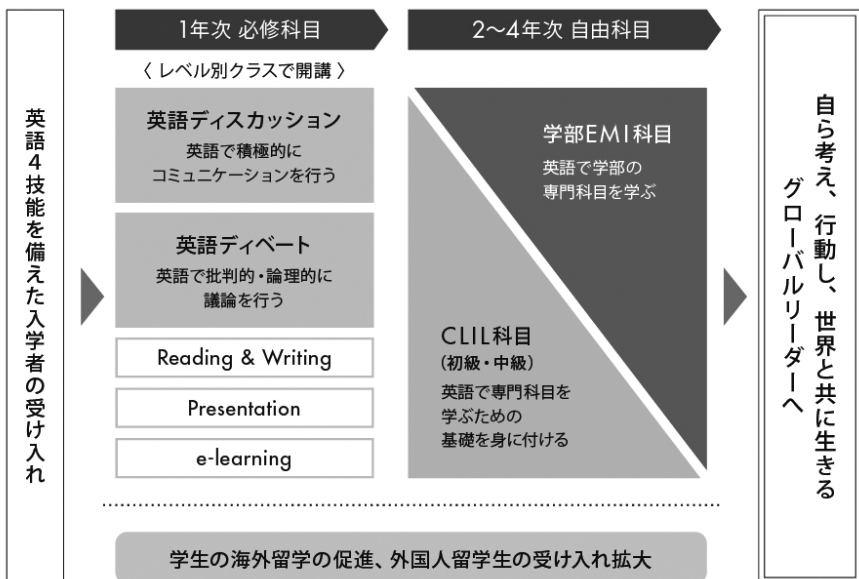
新しく英語ディベートクラスを導入する背景には、主に2つの理由があります。

まず、新学習指導要領の導入に伴い近い将来、入学してくる学生たちの持つ英語スキルや目指す英語力（ニーズ）の変化が予想されます。これまでのカリキュラムは、中等教育まで受動的スキル（リーディング、リスニング）を中心として学んできた学生を前提としていました。しかし、新学習指導要領実施後は初等教育から「聞く」「話す」といったコミュニケーションに慣れ親しみ、中等教育では英語を使って自分の考えを発信する授業を受けることとなります。つまり、高等教育機関では、英語の発信力はもちろ

ん、高度な思考力をさらに発展させる授業が求められるのです。

次に、立教大学は2014年にスーパーグローバル大学創成支援に採択され、それに伴う改革の一つとして、EMI (English-medium Instruction: 英語で学ぶ専門科目) クラスの増加を推進しています。高度な英語力・思考力が求められるEMIコースへの橋渡しとして、1年次必修科目の強化および2年次以降の英語自由科目でCLIL (Content and Language Integrated Learning : 内容言語統合型学習) 科目の導入が求められているのです。そこで新しく1年次必修科目として導入する英語ディベートクラスでは、アカデミックな内容を取り入れ、春学期に培ったディスカッションスキルを土台に、ディベートというツールを通して、より高度な思考力やリサーチスキルを養っていきます。そして、その次のステップとして、CLIL科目を通して専門領域に関する英単語や英語表現に触れると共に、学部の専門科目を英語で学ぶための土台となるアカデミックなスキルを習得することを目指します (図2参照)。

図2. 新英語教育カリキュラムにおける4年間の学びの流れ (立教大学HPより抜粋)



実際、2019年度春学期に、英語自由選択科目「Debate」において英語ディベートクラスのパイロット授業を行ったところ、受講した学生のアンケート結果から次のような学習効果や気づきが得られました。

- 1) 批判的思考力 (critical thinking : 両サイドから論題について議論する)
- 2) 論理的思考力 (logical thinking : 論理的に議論を組み立てる、相手の主張を理解する)

- 3) 情報収集力 (research skills:主張を裏付けるデータ収集、テーマについての知識力)
- 4) チームビルディング (team building:同じチームメンバーと協働的なコミュニケーションを図りながら議論をまとめ、資料を探す)

これらのスキルは、今後 CLIL や EMI を受講する際、また急激に変化するグローバル社会の中で求められる汎用的能力 (key competency) なのです。

新しい英語カリキュラムを導入するにあたっては、英語ディスカッションクラスや英語ディスカッション教育センターで培われた組織的なカリキュラム作成のノウハウが活かされています。前述の通り、春学期のみの開講となった英語ディスカッションでは、英語ディスカッション教育センターのプログラムマネージャーの協力のもと、これまで1年間かけて学生へ紹介してきたディスカッションスキルを1学期へ集約させる作業を実施しました (図3参照)。また、これまでの英語ディスカッションクラス同様、統一のオリジナル教材をレベル別に4冊制作しました。

図3. 英語ディスカッションクラスの授業スケジュール

2019		2020	
Spring	Discussion/Communication Skills	Spring	Discussion/Communication Skills
Lesson 1	Introduction of all Communication Skills	Lesson 1	Introduction of all Communication Skills
Lesson 2	Opinions	Lesson 2	Opinions
Lesson 3	Supporting Opinions/Reasons	Lesson 3	Supporting Opinions
Lesson 4	Comprehension	Lesson 4	Follow-up Questions
Lesson 5	Discussion Test 1	Lesson 5	Review, Comprehension; Discussion Test 1
Lesson 6	Definitions/Examples	Lesson 6	Connecting Ideas
Lesson 7	Joing a Discussion	Lesson 7	Joing a Discussion
Lesson 8	Paraphrasing	Lesson 8	Changing Topic
Lesson 9	Discussion Test 2	Lesson 9	Review, Paraphrasing; Discussion Test 2
Lesson 10	Changing Topic	Lesson 10	Different Viewpoints
Lesson 11	Possibilities	Lesson 11	Balancing Opinions
Lesson 12	Clarification	Lesson 12	Information
Lesson 13	Discussion Test 3	Lesson 13	Review; Clarification; Discussion Test 3
Lesson 14	Review of all skills	Lesson 14	Review of all skills
Fall	Discussion/Communication Skills		
Lesson 1	Introduction of all Communication Skills		
Lesson 2	Connecting Ideas		
Lesson 3	Closing Topics		
Lesson 4	Comprehension		
Lesson 5	Discussion Test 1		
Lesson 6	Different Viewpoints		
Lesson 7	Sources of Information		
Lesson 8	Paraphrasing		
Lesson 9	Discussion Test 2		
Lesson 10	Balancing Opinions		
Lesson 11	Comparisons		
Lesson 12	Clarification		
Lesson 13	Discussion Test 3		
Lesson 14	Review of all skills		

さらに、英語ディベートクラスを統一カリキュラムとして展開するために、ここでも英語ディスカッションでのノウハウを活用しています。一番重視したのは、一貫した「授業の質」を確保することです。その一つとして、学生の学習到達状況を評価統一ルーブリックで作成し成績評価に用いることとしました。ルーブリックを用いることで、学生たちも学習目的が明確となり、より高い学習効果が期待できます。評価項目は、構成力、主張力、反駁力、プレゼンテーション力の4項目から成り、それぞれの達成度を評価します。

2020年度から同じ1年次必修科目である「英語eラーニング」も授業形態がよりインタラクティブに変わりますが、急激に変化するグローバル社会の中で求められるのは、英語をツールとして使いこなしながら、多様な背景や価値観を持つ他者と協働し、社会のさまざまな領域で新たな解決策を見出していく汎用的能力（key competency）です。そのためには、単に「英語を話す」だけでなく、英語のクラスを通して、クリティカル・シンキングを身に付けてもらいたいと考えています。クリティカル・シンキングというのは、正解は必ずしもひとつではないものに対して、根拠を用いながら、さまざまな視点から批判的に分析をして、答えを論理的に導き出す思考力です。新カリキュラムでは、こうした力を全ての学生が身に付けることができる環境を整えていきます。

英語ディスカッションクラスで培われたノウハウや、外国語教育研究センターへ向けられた提言を、新しいカリキュラムやセンターの運営に活かしながら、立教の英語カリキュラムのさらなる発展へつなげていきたいと思えます。

## 謝辞

本論文編集にあたり、外国語教育研究センター設置準備室の新多了教授および全カリ事務室にもご協力いただき感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

立教大学「英語を実践的に使いこなす「もう一歩進んだ力」を——2020年度、立教の英語教育カリキュラムが変わります」<<https://www.rikkyo.ac.jp/closeup/global/2020/mknpps000001321s.html>> (2020年1月29日アクセス)